

【書評・紹介】

岸上 伸啓 著 『北極海の狩人たち クジラとイヌピアットの人々』

(札幌, 風土デザイン研究所, 2012年1月, B5版, 133頁, 税込2700円)

岩崎 まさみ

イヌイト研究を中心に、狩猟民の食物分配に関する研究を重ねてきた国立民族学博物館の岸上伸啓氏が、最近のアラスカにおける現地調査をもとに本著を出版した。冒頭で岸上氏は「文化人類学とは」と題して、この学問領域に対する自身の真摯な思いを語っている。他者と自分の違いを理解しあうことにより、多文化社会での共生が可能であると語る岸上氏は、本著が単なる研究成果本として終わるのではなく、多文化社会に生きる読者たちがイヌピアットの人々の生活を知ることを通して、自らの日々の生活を振り返るきっかけとなることを意図としていることが分かる。岸上氏は「我々とは異なる生き方や価値観を持つアラスカの先住民イヌピアットの暮らしを紹介したい」と念を押すのは、本著のハイライトであるイヌピアットの捕鯨活動が、現代社会における主流社会と周辺社会の価値観の対立を象徴する問題そのものだからである。

表紙画像

序論でイヌピアットの人々が住む自然環境や歴史的背景を説明した後、本著は第1章で「イヌピアットの歴史と現状」、第2章で「米国最北の村 バローの生活」、第3章「北極海にホッキョククジラを追う」、第4章「鯨の民の世界観」、第5章「世界とつながりながら生きる」と展開していく。本著はイヌピアットに関する地理・歴史・社会・文化・経済・宗教、さらには開発の問題や地球温暖化現象に至る広範囲な内容に関して、現地調査に基づく生き生きとした描写と深い考察を紹介し、まさに現代イヌピアットに関する百科事典とも言える包括的な内容である。また岸上氏は現代のイヌピアットの一集団としてアラスカ、バロー村に住む人々をとりあげ、これらの人々を取り巻く現代的課題に焦点を当てることにより、具体的な事例の分析をもとに、一般論に留まらずに、現代のイヌピアットの生活へ鋭く切り込んでいる。

序論から第1章では、ベーリング海を越えてアジアからやってきたアメリカ先住民一般の歴史背景の記述に始まり、後半ではイヌピアットに特定した歴史的变化をたどり、1971年のアラスカ先住民土地請求処理法 (Alaska Native Claims Settlement Act) に至るまでの社会・経済・文化的変化を分析することを通して、北米先住民全体の中でのイヌピアットの歴史的な位置づけを明確にしている。特に第1章の最後には1850年頃のイヌピアットの生業活動を取り上げ、その当時に捕鯨活動が1年のうちの約9カ月を占める中心的な活動であったことを明らかにしている。岸上氏はこの時代を「イヌピアットの伝統時代」と呼び、その時代はイヌピアットの衣食住が捕鯨や狩猟などの生業活動と深く関わっていたとしている。これらの記述は現代のイヌピアットの人々を理解する上で不可欠であり、後半に紹介される現代の捕鯨活動の意義へ結び付く重要な指摘である。

第2章以降は本著の中核的考察であるバロー村のイヌピアットの生活へと展開して行く。

1867年にアラスカが米国領になるとまもなく、これらの地域に米軍の気象研究所が建設され、その後もレーダー基地が設置されるなど、軍事的な要所として発展した。また1970年代にはブルドー湾の石油開発が始まり、それに伴いバロー村における経済的発展は加速した。その事実を裏付けるデータとして1939年から2003年に至る、バロー村の人口推移が紹介されているが、その数字は363人から4429人と12倍にも膨れ上がり、バロー村の近年の変化が急激であることを物語っている。岸上氏はバロー村のイヌピアットたちがめまぐるしい変化の中で生きる様子を、経済生活、社会生活、家庭生活の3つの分野に分けて検証している。現在のイヌピアットの経済は賃金労働と生業活動の二重経済であり、それに伴い伝統時代の分配と交換に加えて、現金が介在する売買が中心的になり、その変化に伴い家族や社会全体が変化しているとしているが、岸上氏はこの変化を「自然環境への適応を重視する生活様式から、自然環境とともにグローバル化により引き起こされてきた政治・経済的な環境に適応する生活様式へと大きく変化してきた。」と要約している。

第3章は本著の主題であり、岸上氏が最近の現地調査で得たデータを駆使して、現代の捕鯨の現状を記述している章である。1980年代から1990年代にかけて捕鯨問題に関わった本稿筆者の経験では、アラスカ・エスキモー捕鯨者たちは外部からの研究者を歓迎する雰囲気はなく、むしろ外部に公開する情報は最小限にとどめて、エスキモー捕鯨の存続に勤めていた事を記憶している。その理由は国際捕鯨委員会中外において、反捕鯨活動のターゲットは日本を始めとする商業捕鯨国に留まらず、その矛先を先住民捕鯨にも向けていたからである。エスキモー捕鯨者たちは、いかなる情報であろうと、外部へ流出した情報は、反捕鯨活動家たちに歪曲されてエスキモー捕鯨への批判材料として利用され、その結果自分たちを苦しめる事になることを知っていたからである。岸上氏がバロー村での調査許可を得た事を知り、筆者は岸上氏の研究へ向けた執念に驚嘆したことを記憶している。バロー村での捕鯨活動に関する調査は、それ程に画期的なことなのである。ここで付けくわえて置かなければならないことがある。「いわゆるアカデミックな研究者」による研究は、1980年代から1990年代はまさに空白の時期であった。しかしこの空白の期間に、アラスカの文化人類学コンサルタントであるスティーブン・ブロンドたちが、エスキモー捕鯨委員会などの依頼を受けて、彼らの捕鯨活動に関する調査を活発に行い、その研究成果はアメリカ政府の公式報告書としてIWCに提出されていた。その量は膨大であり、当時エスキモー捕鯨が直面する課題に対して、文化人類学や統計学などの学際的知見を駆使して課題の解決を試みる典型的な応用研究がなされた。これらの研究はIWCの報告書としてファイルされていることから、一般の研究者の目に触れる機会が少ないことは残念である。

第3章は6節に分けられ、第1節から5節までは、捕鯨活動の詳細を多くの写真を用いながら丁寧に説明している。それを読み進んでいくと、イヌピアットの人々の捕鯨活動が「先住民捕鯨」のイメージそのものであるという印象を抱く。つまり現在のイヌピアット捕鯨には、第1章で岸上氏が表現した「イヌピアットの伝統の時代」にあった生業としての原型が強く生きていけると言える。バロー村では春季と秋季の捕鯨活動に先駆けて、ボートキャプテンを中心として、地縁集団を軸に捕鯨集団が形成される。春季と秋季の捕鯨活動に記述には、クジラを見張る作業、女たちがアザラシの皮をウミアックの船体に縫い付ける姿、解体や分配作業の様子、捕鯨後の祝宴など、今も変わらずに続くエスキモー捕鯨の光景が描かれている。岸上氏は「バロー村の生業の年周期は、現在でも、春季と秋季の捕鯨を核として形成されている」とまとめている。またイヌピアットの人々の捕鯨には商業性が無い事や、捕鯨活動にかかる費用が

高額であり、他の賃金労働で得られた収入によって捕鯨活動が支えられている事実など、岸上氏の緻密なフィールドワークゆえに得られたデータをもとに、現代のイヌピアット捕鯨の様子を生き生きと描いている。

第3章で最も注目したいのが、最後の第6節である。岸上氏はここで「捕鯨の現代的な意義」を問いかけている。第一に捕鯨活動はイヌピアットの独自性を示すエスニック・シンボルであり、アイデンティティである。さらに捕鯨はイヌピアットの世界観やジェンダー観の基盤として機能しているなどの指摘をしたうえで、「現在においてもホッキョククジラの狩猟と獲物の分配・流通・消費はイヌピアットに人々にとって、政治的、文化的、社会的、そして栄養学的に重要である」としている。岸上氏の指摘はさらに、イヌピアットの人々が国家や国際社会などの主流社会の中で先住民として生きるためには、捕鯨は「社会関係やアイデンティティの維持に貢献する社会・文化的な資源である」と続く。この指摘は第4章の「捕鯨の民の世界観」によって、さらに強調されている。つまり、イヌピアット社会、特に捕鯨に代表される狩猟活動に伴う世界観は、主流社会のそれとは異なること。その例として、クジラの頭部を海に戻すという行為は、イヌピアットが信じる「クジラ観」に基づいている事などを分かりやすく説明している。加えて、イヌピアット社会のキリスト教化や食生活の変化、また社会・政治環境の変化がイヌピアットが育んできた「クジラ観」を脅かす危険性にも触れ、それは「イヌピアット民族の文化基盤を根底から覆すような社会変化」をもたらすと述べている。

最終章では「世界とつながりながら生きる」と題して、イヌピアットの人々がグローバル化によってもたらされる諸問題に直面している現状を紹介している。地球温暖化、海底油田開発や北極海における貨物船や観光船舶に航行、さらに国際捕鯨委員会を始めとする捕鯨をとりまく国際世論などが、捕鯨活動を含むイヌピアットの生活全般に及ぼす影響が深刻であるとしている。その中でも4節では主に捕鯨を取り巻く、国内外の影響の変化をまとめ、最後のグローバル化の中で生きるイヌピアットへと展開し、グローバル化が鯨活動に及ぼす影響に関する分析を行っている。ここで岸上氏はこれらのグローバル化による変化が捕鯨活動の衰退を招きかねない事、そしてそのことはイヌピアットの人々の社会と文化の衰退へと至る可能性を内包しているとまとめている。

イヌピアットたちが「世界とつながりながら生きる」その姿について、岸上氏が描くイヌピアット像が、グローバル化が引き起こす変化の影響下にある「被害者」と見えてくるのは筆者だけだろうか。イヌピアットたちは必ずしも、これらの影響に対して無抵抗な訳ではなく、油田開発や観光開発に積極的に関わって、その恩恵を受けようとする人々の動きはむしろイヌピアットたちが「世界とつながりながら生きる」積極的な姿であり、それらの人々を含めて現代のイヌピアットではないだろうか。さらに言うとなれば、イヌピアットがアメリカ社会で安定的に存在しつづけるには、これらの開発事業から得られる経済的メリットを十分に活かしつつ、傍らで狩猟や捕鯨などの伝統を維持するという難しいバランスを取ることが不可欠ではないかと考える。4節の捕鯨問題を取り巻く変化の記述においても、同様の違和感を否定できない。確かにアメリカ政府との関わりにおいてイヌピアットは不安定な立場にあり、5年ごとの捕獲枠の確定に際して、国際的な外交関係が強く影響することは現状である。しかしIWCにおいて、1970年代末にホッキョククジラ狩の禁止が議論されると、いち早く捕鯨キャプテンたちが集まり「エスキモー捕鯨委員会」を組織し、「エスキモー捕鯨管理計画」を策定し、捕鯨の社会文化的重要性を守りつつ、科学的調査に基づいたクジラ資源の管理を始めている。この委員会はアメリカ政府との共同管理体制のもとで、自らの捕鯨活動の詳細を決定し、その維持に

努力している。エスキモー捕鯨委員会の発言力は無視できないものであり、現にアメリカ政府は IWC に対して 5 年以上の長期にわたる捕獲枠の確定を求めて議論が続いている。このようなイヌピアット側の積極的な動きに注目すると、グローバル化の中で生きぬこうとするイヌピアットの人々の全体像が見えてくるのではないだろうか。そのことはイヌピアットの人々が捕鯨を重要な社会・文化的な核として捉え、アメリカ社会におけるイヌピアットとしてのアイデンティティの拠り所としている現実をより明確に現すことではないだろうか。最終章の最後の部分で岸上氏が「…彼らの文化が大きく変容するか、それとも存続するかは、彼ら自身の意志と実践に委ねられている」と述べているが、「エスキモー捕鯨委員会」がまさに「その意志と実践」の表現であると言える。これらのイヌピアットの積極的な姿勢は他の開発事業にも見られ、イヌピアットたちは 1971 年のアラスカ先住民土地請求処理法で確定した権利を行使して、グローバル化によってもたらされる変化を自らの安定した将来へ結び付けて行く方策を模索していると言えないだろうか。

『北極海の狩人たち』を読み終えて、小さな疑問が残る。それは捕鯨技術の近代化がどの程度進んでいるかと言う問題である。IWC において「人道的捕殺方法」が議論され、クジラの致死時間を短くするための技術開発が積極的になされてきた。先住民捕鯨においても銚の他に、ダーティングガンやショルダーガンなどが積極的に使用されている。また打ったクジラを引き上げることが出来ずに、見失ってしまうケースを少なくするために上空からの探索もなされると聞く。1980 年 12 月に出版された *Arctic* 33 号に、Mitchell and Reeves が “We do not know the extent to which aircraft are used for reconnaissance by the whaler.” と書いている。2011 年 63 回 IWC 年次総会でアメリカ政府が提出した資料にも、“When a whale is lost, local search and rescue operations will join the hunters in the attempt to locate and recover the whale.” という記述がある。一方に先住民の捕鯨は効率性を追求するものではなく、伝統的方法を維持して素朴な技術を守るというイメージがある。しかし同時に都会発信型の動物愛護論を基盤とした「人道性」を先住民族の捕鯨に求める動きがある。この相反する要素がどのようにイヌピアットの捕鯨技術に反映されているかを知りたいという思いで本を閉じた。

文献一覧

The Alaska Eskimo Whaling Commission

2011 “Report on Weapons, Techniques, and Observations in the Alaskan Bowhead Subsistence Hunt”. Submitted by the United States of America to the 63rd Annual Meeting of the International Whaling Commission.

Mitchell, E. and R.R. Reeves

1980 “The Alaska Bowhead Problem: A Commentary”. *Arctic* vol.33. No. 4, pp.686-723

(いわさき・まさみ／北海学園大学)